

林建設の林隆秀社長と建設の話はしたことがない。映画や演劇にとっても長けている人で、話が弾む。東京にも滞在される日は多く、わたしの演劇も見に来てくれる。松浦にも来てくれた。

「いま日本で最高峰の演劇は岡部演劇です」とまで言ってくれ



る。いっぱい演劇を見て歩く人の言葉である。うれしくないわけがない。2人とも食い道楽でカラオケ道楽である。趣味も一緒なのである。

娘さんの鹿児島市での結婚式にはわたしも列席させていただいた。城山観光ホテルである。

る。しかし、式の最後のあいさつでは泣いていた。あれ程の感激屋で娘思いである。泣かないはずがない。うれしかった。また林さんを好きになった。

伊佐公演「長崎の鐘」の立役者であるが、表面に出ることは嫌っていた。伊佐の旅館は離れ

まった時間を見計らって入ったらしい。「わたしをのそくと高いわよ」とたんかを切った女優もいた。旅公演の一興であった。伊佐で知り合ったのが西直樹さんである。西さんは市役所に勤めながら先代から引き継いだ寺の住職もやっている。いまは

伊佐PR課長らしい。知覧の家の仏壇も拝んでもらった。伊佐から知覧までは優に車で4時間はかかる。山また山、野原や川を越えて、嫌がらずに知覧まで来てくれたのである。知覧の家

感激屋の社長の涙

城山観光ホテルは西郷隆盛が自刃をして果てたと言われる洞のすぐ近くにある。鹿児島市や伊

佐市の重要人物といわれる人はすべて列席していたのではないか。「泣くなよ」と言ったら「泣くもんですか」と強がっていた。わたしとは10歳の年の差があ

むだけ飲んで、若い男優が寝静

肉、土地の野菜をさかなに飲

ちを込めて拜んでくれた。

その日の家内の料理は煮しめと、松浦から持ってきた母の形見だった押しずしの器でつくった押しずし、それと伊万里の大川内山の里で買い求めた器で作った茶わん蒸しであった。伊万里、大川内山の「寛右工門窯」が特別にあつらえてくれた器である。「寛右工門窯」には、星鹿の小学校の同級生の妹が嫁いでいた。浦の朝子ちゃんである。いまは窯主の妻、瀬戸口朝子さんである。

押しずしは知覧の人にも振る舞った。評判がよく、知覧に帰るたびに「あの寿司を食いたい」とリクエストがある。押しずしは祭りか祝い事がないとつくらないと説明するが、なかなか納得してもらえない。(松浦市出身)